

饗庭篁村と坪内逍遙

—— 曲亭叢書を通して ——

柴田 光彦

要旨

饗庭篁村旧蔵の曲亭馬琴の遺稿や手沢本類の処分をめぐり、篁村の坪内逍遙への手紙を引き、また入手した際の売却目録の別本を紹介し、早稲田大学図書館に所蔵される曲亭叢書との関係について述べる。

はじめに

本稿は、早稲田大学演劇博物館における演劇講座（平成八年六月五日）において取り上げた「坪内逍遙をめぐる人々―断片―」（一、貸本屋大惣閉店始末 二、饗庭篁村旧蔵「曲亭叢書」 三、雙柿舎の扁額と會津八一）の二に当たるものを骨子に加筆したものである。筆者はかつて早稲田大学図書館所蔵の「曲亭叢書」の館蔵の経緯について略述したことがあるが（「滝沢家訪問往来人名簿―早稲田大学図書館の馬琴旧蔵書―」（「文学」三六巻三号、昭和四十三年三月）、その後木村三四吾氏が、「馬琴遺稿類流傳始末瑣記」（「ヒブリア」四一号、昭和四十四年四月）を稿して、筆者の文をも引き、さらに詳密な考証を加えている。本稿は屋上に屋を重ねる無用のものの危惧もあるが、講座では前稿で触れ得なかつた饗庭篁村の手紙紹介を中心に話したので、此の度はそれを加えて補記して置きたいと思う。そこで前稿と可成り重複するところもあるが、その煩雑さを承知の上で私の記録として再録することとする。

一 饗庭篁村の手紙

早稲田大学の演劇博物館は坪内逍遙の創設にかかり、逍遙ゆかりの資料が数多く蔵されている。その中に「饗庭篁村書簡集」と逍遙自らが題簽を著した乾坤二冊の張込帖がある。逍遙が生前執事の生田七朗に命じて作製させたもので、はがき五通を含む一一一通あり、これらはすでに山本二郎編「坪内逍遙あて『演劇博物館蔵』諸家の書簡」として「坪内

逍遙研究資料」（新樹社）に、連載で翻刻紹介されている。篁村は高島藍泉に文才を認められ、高田早苗を主筆とする読売新聞にあって小説を書いて、須藤南翠とともに明治二十年前後の二文星と称せられた。篁村が初めて逍遙を訪ねたのは明治十九年一月という。二十二年、朝日新聞社に移り、竹の屋主人の名で歌舞伎劇評を担当して名声を博した。二十四年前妻と別れていた篁村は、逍遙の媒酌で後添えしげ子を迎え、やがて東京専門学校において、江戸文学研究で近松を講じている。酒豪で、逍遙宛ての書中にもしばしば「中酒」「酔倒れ」「大酔」「グズ酔」「禁酒」などの語句が散見する。

これは明治三十九年、篁村五十一歳の八月二十二日付の逍遙宛の書簡（八十五、第五集。昭和四十九年所収）の一節、追申に「巻紙にハとても書つくされずと存じ、失礼ながら原稿紙二認め、御推恕被下度候」と玉川堂の四百字詰の青野原稿用紙五枚に記されている。住居は向島小梅町。十日程前より痰咳に悩み、それに風邪を加え、熱燭と荒療治を試み、

気管支カタルをおこし、夜中動悸激しく、呼吸困難に陥り、昔馴染みの医者に「酒ハ禁ずべし。今ニ於て全愈させずバ喘息となり、死ぬよりの大苦しミを毎年なすニ至るべし。年ハ幾つになつたか、ナニ五十二大層年をとられた。五十にもなればモウ子供でもないから酒ハ慎しむべし」としめじみと意見されたと書き、なお長々と禁酒の記事が続く、「盲目が俄に目が開いて見ると、懸崖一步之險処に立居り候て驚き候如く、小生も今急ニ眼を開いて大ニ家計上も困難窮迫なるに驚き申候。先頃、御

厚意を以て家に離るゝ苦境を免かれ候が、またく酒屋・米屋の買掛け、盆残りの上、次男儀、仙台へ入学等にて大まごつき、と家計の収入・借金の大概を記し、

(前略) 右二付、来月七日頃、二男仙台へ向け出立まで二百七八十円の当座、至急の入用有之、此の才覚に行きつまり、今まで荆妻のいろく申し候を、酒の勢ひを以て追払置き候へ共、さめてハ妻ばかりを退治しても効なきを悟り、此二一計でもない窮策を案出し、またく大兄に御迷惑を願ふ事二御座候。

此間、幸堂得知氏参られ候とき、夫となき世間話のうち、西鶴ものハ六七種二七三味線でも出セバ、二百円にハ直ぐ売行くとこの事二候ひしかども、小生、西鶴ものなど売出し候となりてハ、広いやうにて狭い世間、忽ち内兜を見透かさされ候べし。此に於て当山唯一の什物にハ候得共、馬琴の八犬伝草稿を早稲田文庫へ御買上げ(でハ是も不妙なれば、何とかよき名義にて實際紙魚の類ひハ裏打ちの大修繕にも及びがたく、其他水災・火難等にて万一の烏有も計りがたく候へバ、保存の主意にて相頼度、此儀御配慮相頼度、如何ニ御座候や。三十七冊総裏打にて御座候。(小生、粗忽にて例のごとく書とめ無之候が、すでに一二冊紛失仕候。)これを百五十金にて図書館へ御納願度候。曲亭翁の此の原稿ハ見たばかりにて、諸生も感奮、興起すべく、また翁の著作の苦心と妙処をも一目瞭然可仕、全く弊家に貯蔵いたし、珍がりて居り候より、世益とも相成り可申敷

と、聊か勿体を付け申候。希はくハ御配慮ニあずかりたく、只管願上候。若し御心配甲斐も無之と思召され候はゞ、只葉書にてよろしからずとばかり、御知らせ願上候。此事ハ荆妻に話し不申候。安心させて、また力を落さずする事などありてハ、徒らに気の毒と存じての事、何卒御噂無之、願上候。併し御心配之効相とゞき候やうなれば、大きく御知らせ被下度候。其時ハ打明け悦ばせ可申候。大暑中二此の暑苦しき願事、恐縮此事と存じハ候得共、他二斯る事情申上る所も無之、相交らず御迷惑相かけ申候。但しどちらの道にしても禁酒ハ大受合、また大勉強もたしかなもの二御座候。

此儀ハ御安心被下べく候。先願まで、匆々頓首

八月廿二日朝

村の きうさく

春の屋大兄

坐下

逍遙は篁村よりの五枚にわたる長文の窮状の訴えを読み、早速翌日に、夫人を代理として図書館長市島謙吉の許に遣して、篁村の意向を伝えた。東京大学以来の親友で春城と号し、文事に明るく、東京専門学校が早稲田大学となって初代の図書館長で、大隈重信の片腕として、大学経営を補佐し、名館長と評価される人である。その日の春城の日記に、

坪内妻来り、饗庭篁村より其の所蔵の馬琴八犬伝原稿三十七冊売却いたし度し云々につき談示あり、承諾す。

そして、その翌二十四日には、

雨、坪内を訪ふて話す。饗庭より馬琴八犬伝第八・第九草稿三十冊、百五十円にて購入。代金渡済。これは当自分所有とし、図書館経済の都合を見て、館に引渡すべき者也。

とある。春城は日記以外にも多くの事を書き留めているが、その一つ「東壁続記」にそのことを記す。

そもく、篁村所蔵の八犬伝草稿は、他の日記其他の稿本と共に往年二百円にて馬琴の親族より買ひ取りしものにて、篁村は馬琴の崇拜家にて、馬琴の稿本を珍襲すること尤も甚しく、猥りに人に示す事をだになさざりしに、何故突如草稿中の随一、八犬伝を手離さんとするに至りしぞ、無論、若干の金を要する事の出来たるが故なり。篁村はこれにつき、長文の書状を逍遙に寄せたり。其の結果として、逍遙妻は余の許に来て曰く、

篁村八犬伝の草稿を百五十円に売らんとす。願くは、早稲田図書館に之を購へよ。他に望み人あれども、篁村にて売るを欲せず。表面早稲田へ寄託と云ふ名義にして、内実売りと云ふ也。云々。余直ちに諾し、且つ曰く。図書館には今之れを購ふ資金なし、先づ自ら之れを購ひ置き、他日図書館の有とせん。勿論他人に秘すべければ、安心あるべしと。翌日坪内を訪へしに、書物は既に到達し居れり。逍遙曰く。君も流石に書物好なり。あれほどのもの二ツ返事に購入を諾すとは実に感服なり。云々。

と。逍遙の日記はこの年を欠いている。なお、それ以前においては名古屋大惣の閉店にあたり、当時の早稲田では三千円、乃至千五百円の大

枚は到底工面なりがたく、折角の機会を逃したことがあった。

またさらに「訪書劄記」には、翌明治四十年六月二十二日、逍遙は夜来春城を訪問して、さらに篁村蔵の馬琴手沢本の処置について相談したことを記す。

饗庭もいろく内情あり、今度五百円ほどの金に窮し、馬琴の原稿其他手沢本を一括し、早稲田の図書館に譲りたしと申出たあり。饗庭も現下朝日新聞より百円の収入ある外他に収入の途なし、内実困窮して居る。併し書物を商賈の手にかけるは、仮令ひ高価に売る便利ありとも、これを欲せず。前に里見八犬伝の原稿を早稲田に譲り受け足る縁故により、今回も早稲田へ特に譲りたしと申す事如何にと、……。

春城は、翌日、高田早苗を早朝に訪ねて、昼食を共にしながら相談協議して、了解を得て、午後より逍遙宅を訪問、そして二十五日の朝、雨中に車夫を向島の篁村宅へ遣わして、本を取り寄せた。ただし、このたびのことについての篁村の手紙は残されていない。春城の当日の日記には、「饗庭より図書に添へ返書来る。図書二百冊悉く馬琴遺愛のものにして、自筆本多く、珍賞措かず、二時より夜に入つて已む。……夜に入り坪内を訪れて、馬琴図書の事を話す」と記されている。

なお、前に続く「八十六」（明治二十九年九月以後）に、書籍処分のこと「本ハ八文字屋物および俳諧物すべてに金五百円ニ御買上相願度候。是ハ鑑踏張り、鞍かさに突立上りての言値に御座候。いかほどにても負け候。此次ハ黒表紙・赤本・黄表紙・コンニヤク類を可相願候。英二郎

儀、昨夕七時半之汽車にて仙台へ出向き候」、「八十八」（明治四十年八月五日）「八文字屋物と俳諧物、書籍館にて御引取下され候やう、何分よろしく御取計ひ願上候」といった記事もある。

東京大学附属図書館長であった和田万吉は、「早稲田大学図書館の曲亭手沢本」（「書物の趣味」第五冊、昭和四年十二月）の中で「早大図書館への伝来については饗庭氏から直接に譲られたものと聞いて居る。而して饗庭氏に入るまでの数伝は明かに知るやうも無い」と述べ、逍遙はその著『柿の蒂』（中央公論社 昭和八年、『選集』別冊四 所収）に、「饗庭篁村の事」として篁村が馬琴の資料を入手した事について次のように記している。

廿一二年の比であつたらう、馬琴の遺稿や遺物が偶然に彼れの手に入った。それまでは、例の慢心嫌ひの彼の事とて、余り馬琴には好感を持つてゐなかつたが、遺稿が手に入つてからは、次第に馬琴の愛好者となり、晩年にはそれ以上にさへもなつてゐた。

どうして馬琴の遺物が彼れに帰したか？

其手続きは、其当時一わたり私も慥かに当人から聞いた筈だが、今はまるで忘れてしまった。で、最近、山田氏〔清作〕にたづねて見たところ、氏もくはしくは聞いてゐない。但し大体は斯うである。

或日、竹のやの根岸の宅へ、馬琴の嫡男、滝沢宗伯の孫（？）と称する女、年令は廿か廿一と見える女が、其情夫らしい、目の鋭い、遊び人風の男と共に——紹介者があつたか、なかつたか、山田氏は聞き洩したさうな——訪ねて来た。家計上の都合により、馬琴から

伝はつた物全部を相当の金に代へて他へ譲りたいといふ話。其遺物中の主要な品々は、第一に『八犬伝』其他の原稿数十冊、中には未刊行、未発表の遺稿もあり、折に触れての雑記もあり、晩年の日誌もあり、系図もあり、印章類もあり、種々雑多の反故と共に書画類の貼込み二巻、器具も若干点、といふ申し込み。幸ひにもそれは俸給が五十円に上り、懐ろもやゝ裕かな上に、長い節約生活の結果、幾らかの貯へも出来てゐた際なので、竹のやは大奮発で、悉くそれを引取ることにした。代価は、其当時彼れから聞いたが、私はうろ覚え、山田氏は聞き洩したと云ふ。たしか、多くも百五十円以下であつたあうだ。其際、系図と印章とは、此方には必要のないもの、先方には大切な品だからとて、返してやつた、といふ事である。其男女は右の代金を旅費として、それから北海道のほうへ赴いたとか。其娘の話によると、馬琴宛の書簡が近い比までは沢山あつたが、みんな髪を結ふ時の手ふき紙にしてしまつた。又、古い錦絵類もあつた。が、それらは近所の子供らにやつた。云々。

ことしは馬琴死後の八十五年なので、彼れに関する展覧会や記念祭が催された。系図や——よしそれが多少インキキな品であつたにもせよ——印章類があつたら、研究家の為には、何等かの参考になつたらうに！

竹の屋が買ひ入れた品々のうち、原稿や遺稿だけは、彼れの存命中に早大図書館が譲り受けたから、今尚ほ悉く保蔵されてある。：

（昭和七・一一・二七）

二 曲亭叢書目録

右の記録によれば、これらの遺品は逍遙と春城の二人の連携によって早稲田大学図書館に二回にわたって収蔵されることになったことがわかる。すなわち、先述の如く最初は「八犬伝原稿」三七冊が、市島館長の英断による一時立替により、二度目は翌四十年に高田総長の特別の計らいにより一括購入し、「曲亭叢書」の名で整理されている。今、図書館の分類目録「総類」（昭和十一年）の叢書の項の順序により掲げ、仮に各細目の頭に通し番号を付す。下の数字は請求小番号であり、印刷目録編集にあたって、部立をして並べ換えている。總類の記述は細目の書名を並べているのみであるが、印刷目録の「文学之部（上）」（昭和八年）ならびに展示目録を参考に、便宜的に私の手控えも少しく加えて補記する。ただし、あくまで略目録であり記述はなお不備で、角書はもとより大きさなども省略した。また誤記の不安もあり、斧正を乞うばかりである。

曲亭叢書 写・刊交 和大・中・小 二二六冊 イ四*六〇〇（特別図書）

* 今、図書館の叢書の末尾の小番号は分類目録と違っているが、それはその後に加えた資料であるのでこれを省きみに補記した。後にあげる「曲亭所有品草稿類」の目録にないものは書名の頭に+を付した。なお記述が不確実で曖昧なため照合の不可能のものも残る。

著作部

（小番号）

- 1 南総里見八犬伝稿本 第八集ノ内六冊・九輯ノ内三一冊
馬琴自筆（終七冊路女筆）——天保二至二年 三七冊（一一三七）
- 2 新編金瓶梅稿本 第十集八巻 他筆——天保一五年二月中口授筆録
（四冊合本）一冊（三八）
- 3 女郎花五色石台稿本 第一・四集 他筆——弘化三年五・六月、嘉永元年
四・五月中口授筆録
（八冊合本）二冊（三九—四〇）
- 4 + 敵討鼓瀑布稿本 四一—四二 自筆——文化三年 二冊（四一—四二）
- 5 + 敵討鼓瀑布 二編六巻 豊広画 文化四年 （六冊合本）一冊（四三）
- 6 栖傘雨談序 刻序・李前荆棘（鈴木実信自筆）共 自筆——天保七年 （合綴）一冊（四四）
- 7 + 曲亭題跋 乾坤 江川亭佳友編 写本 二冊（四五—四六）
- 8 風月庵主に答る文 自筆——寛政九年 一冊（四七）
- “ 百川合会叙 自筆——享和元年 （合綴）一冊（四七）
*（東岡舎蔵書目録とも。家書部参照）
- 9 老鳥庵評批言の弁 自筆 一冊（四八）
- 10 羅文居士七回忌追善俳諧表六句 自筆——文化元年 一冊（四九）
- 11 由井浜政語入船 零本 自筆 一冊（五〇）
- 12 故事部類抄 馬琴編 自筆 （合本）五冊（五一—五五）

- 13 淵鑑類函馬部抄録 自写—文政四年 一冊(七七)
- 〃 阿修羅考 自筆—天保四年 (合綴) 一冊(五六)
- 14 豊後国六郷山両子寺大縁起 自筆—文化一二年 二冊(五七)
- 15 豊後洲国埼郡両子寺略縁起 自筆—文化一四年 二冊(五八)
- 16 異聞雜考 二卷 自筆 一冊(五九)
- 17 曲亭間記 三・四 馬琴編 自筆 一冊(六〇—六一)
- 18 惜字雜箋 乾坤 自筆(一〇種) 二冊(六一—六三)
- 19 惜字雜箋 春夏秋冬 自筆(一九種) 四冊(六四—六六)
- 20 +三七七全伝南柯夢自校本 六卷・南柯後記二帙八卷 自筆校正 一冊(六八)
- 21 +曲亭馬琴遺墨 自筆 一卷(二二—二三)
- 批評部
- 22 犬夷評判記第二編稿料 篠斎筆—天保九年 一冊(六八)
- 23 八犬伝篠斎評 八輯下帙 上下 篠斎筆—天保三年 合本 一冊(六九)
- 〃 八犬伝篠斎評 九輯上帙 上下 篠斎・馬琴筆—天保七・八年 合本 一冊(七〇)
- 〃 同 九輯下帙上 篠斎・馬琴筆—天保八年 一冊(七一)
- 〃 同 九輯下帙中上 篠斎筆—天保一〇年 一冊(七二)
- 〃 同 九輯下帙中下 篠斎・路筆—天保一二年 一冊(七三)
- 〃 同 九輯下帙下 篠斎筆—天保一二年 一冊(七五)
- 〃 同 九輯下帙下編上 篠斎筆—天保一二年 一冊(七六)
- 〃 同 九輯下帙下套中 篠斎・路筆—天保一二・三年 一冊(七七)
- 〃 同 結局下編上 篠斎・路筆—天保一四年 一冊(七八)
- 〃 同 結局下編下 篠斎・路筆—天保一四年 一冊(七九)
- 24 八犬伝置翠君評并答評 石川豊翠・馬琴筆—天保七・八年 二冊(八〇—八一)
- 25 八犬伝桂窓評 八輯下帙 桂窓筆—天保三年 一冊(八二)
- 付〔桂窓九輯再評・俠客伝四輯評 天保六年〕
- 〃 同 九輯上帙 写(馬琴校訂・識語)—天保七年 一冊(八三)
- 〃 同 九輯中帙 写(馬琴校訂)—天保七年 一冊(八四)
- 〃 同 九輯下帙上 桂窓・馬琴筆—天保八年 一冊(八五)
- 〃 同 九輯下帙下 桂窓・筆工・馬琴筆—天保九・一〇年 一冊(八六)
- 26 同〔桂窓評〕 九輯下帙下中 写—天保一〇年 一冊(八六)
- 新編金瓶梅第七集略評 篠斎筆—天保一二年 合綴 一冊(七四)
- 〔*馬琴の題箋の書き損じ「篠斎」による誤入。〕
- 27 八犬伝黙老評八輯上帙下帙・九輯中帙 黙老・馬琴筆—天保三・七年 一冊(八七)
- 〃 同 九輯中帙 写(馬琴校訂)—天保七年
- 〃 同 九輯下帙下 木村黙老筆(馬琴朱訂—天保一〇年)(合本) 一冊(八八)
- 28 新編金瓶梅第六輯黙老評 同
- 29 増補稗史外題鑑黙老批評 木村黙老筆(馬琴朱訂) 合本 一冊(八九)
- 30 八犬伝九輯下帙中桂窓兩評 写(馬琴朱書—天保九年)合本 一冊(九〇)
- 付 俠客伝略表拾遺

- 31 同 八輯〔下帙〕 黙老評 答 馬琴自筆—天保三年・写(桂窓)
 篠斎評答 写
 〔八犬伝八・九輯再評・俠客伝四輯評〕 馬琴自筆(桂窓宛)
- 32 同 第二輯桂窓評 自筆—天保四年 合本 一冊(九二)
 同 第四輯疊翠評 自筆—天保六年 合本 一冊(九二)
- 33 同 京師淀新評 淀屋新太郎批評 写(馬琴)—天保七年 一冊(九三)
 34 新編金瓶梅五集篠黙桂三評 殿村篠斎・木村黙老・小津桂窓批評・
 馬琴答評 写(馬琴朱書) 一冊(九四)
- 35 三遂平妖伝国字評 木村黙老原評・馬琴批評 自筆—天保四年 一冊(九五)
- 36 水滸後伝批評半閑窓談 馬琴批評 自筆—天保二年 一冊(九六)
- 37 明版水滸後伝序評 馬琴批評 写(馬琴朱書)—天保二・
 文政一三年 一冊(九七)
- 38 続西遊記国字評 馬琴辭表 写—天保四年 一冊(九八)
- 39 後西遊記国字評 木村黙老批評 自筆—天保四年 一冊(九九)
- 日記部
- 40 戊子日記 文政一一年 馬琴自筆(一至四月、宗伯代筆) 一冊(一〇〇)
- 41 壬辰日記 天保三年 馬琴自筆 一冊(一〇一)
- 42 癸巳日記 天保四年 馬琴自筆 一冊(一〇二)
- 43 + 无益の記 文化一二年 馬琴自筆 一冊(一〇三)
- 家書部
- (8) 東岡舎蔵書目録 寛政十年八月改 馬琴自筆 (四七)
- * (風月庵主に答る文・百川合会叙と合綴)
- 44 琴嶺雜記 卷之一 宗伯筆(諸本書抜) 一冊(一〇四)
- 45 師竹庵聞書 羅文記 自筆 一冊(一〇五)
- 46 続网両談草稿 羅文撰 自筆 一冊(一〇六)
- 47 + 俳風月両話 写(羅文筆力) 一冊(一〇七)
- 48 夢見草 馬琴考妣追善 羅文編・馬琴補正 馬琴筆—寛政九年 (一〇八)
- ” 八百韻書抜 羅文判 羅文自筆—寛政九年 (”)
- ” 羅文居士七回忌追薦之記 馬琴編 自筆 (合綴) 一冊(”)
- 49 笠の露 馬琴撰 自筆—寛政一一年 一冊(一〇九)
- 50 夢の秋 羅文居士三回忌追薦 馬琴編校 自筆—寛政一二年 一冊(一一〇)
- 51 + 羅文大祥記追薦句帖(無題) 馬琴編 自筆—寛政一二年 一冊(一一一)
- 52 東岡舎附合集(天明・寛政) 羅文編 自筆 一冊(一一二—一四)
- 53 俳諧有也無也之関 羅文写 一冊(一一五)
- 54 俳句帖(無題) 写 三帖(一一六—一八)
- * 馬琴・羅文・可蝶・蘇山・孤遊等。分類目録の總類には「曲亭句集」
 とあり。
- 55 入門名簿 寛政九至文化三年 馬琴記 自筆 一冊(一二九)
- 56 + 滝沢家訪問往來人名簿 馬琴記 自筆 一冊(一二〇)
- 57 敬惜字紙小成 上・下 馬琴編(肉筆貼込) 二卷(一二一—一二三)

- 58 + 受通流茂平志別集 馬琴編(刷物張込) 一卷(一一三)
- 家記部
- 59 玉照堂遺愛字紙 上・下 馬琴編—天保七年(宗伯遺品貼込) 二卷(二四—二五)
五卷(二六—三〇)
- 60 家廟遺墨 五卷 馬琴編(貼込) 五卷(二六—三〇)
- 藏本部
- 61 皇統授受図 山宮維深撰 馬琴写—寛政九年 一冊(三二)
- 62 北条分限帳 写 馬琴校訂—天保六年 一冊(三三)
- 63 奥州後三年記 三卷 馬琴写・校訂・書入 一冊(三三)
- 64 將門記 寛政一二年刊(馬琴校訂—文化六年) 一冊(三四)
- 65 日本書記撰者弁 河村秀興・同秀根撰 文化九年刊 一冊(三五)
- 66 読紀小識 村田春海撰 馬琴写—寛政五年 一冊(三六)
- 67 陸奥話記 奥羽軍志 辻了の訓校 刊(寛文二年識) 一冊(三七)
- 68 桜雲記 二卷 写(文化三年馬琴識) 一冊(三八)
- 69 残桜記 伴信友撰 馬琴写—文政一年 一冊(三九)
- 70 はなさく松 塙保己一撰 馬琴写—文化四年 一冊(四〇)
- 〃 三議一統之弁 伊勢貞丈撰 馬琴写—文化四年 合綴 一冊(四〇)
- 71 + 揚州十日記 明・王秀楚 宗伯写—文政六年 一冊(四一)
- 72 暹羅紀事 馬琴写・校訂—文化五年 一冊(四二)
- 73 讃岐直島長三宅氏由緒書 写(馬琴識語—天保七年) 一冊(四三)
- 74 + 讃岐国香川郡直嶋全図 写 一鋪(四四)
- 75 本朝紹運統録 速水常房等撰 刊(安永二年) 一冊(四五)
- 76 新板源平系図 刊(馬琴朱書入) 一冊(四六)
- 77 日次紀事 抄録(十・十一月) 黒川道祐撰 写 一冊(四七)
- 78 八文筆記 古河辰撰 馬琴写—文化二年 一冊(四八)
- 〃 佐渡事略 二卷 中原広通撰 馬事写—文化二年(合綴) 一冊(四八)
- 79 長崎総図 下写 一鋪(四九)
- 80 魯西亞志 桂川国瑞訳 写 一冊(五〇)
- 81 + 梅桜日記 小津桂窓撰 写(馬琴識語—天保四年) 一冊(五一)
- 82 両菩薩巡拝記 大郷詮勝撰 写 〃 + 春湊記 附録共 同撰 写 〃 + 浜之真砂 間部詮勝撰 写(馬琴識語—天保六年)(合綴) 一冊(五一)
- 83 帰郷日記 木村巨撰 写(馬琴識語—天保六年) 一冊(五三)
- 84 享和のはやり神 西原俊江撰 馬琴写—文政八年 一冊(五四)
- 85 縁起部類 五八種 刊写混合 六冊(五五—六〇)
- 86 告志篇 徳川斉昭撰 写 一冊(六一)
- 87 黄帝宅経 苗村元長校 文化一〇年刊 一冊(六一)
- 88 秘記諸留書 写 一冊(六三)
- 89 正徳四年金銀後代御条目 馬琴写—文政九年 (合綴) 一冊(六四)
- 〃 (寛政三年) 町法被仰渡書 刊 (合綴) 一冊(六四)
- 90 甲州天目山楼雲寺十境詩歌 業海詩・武田信満歌 羅文写 一冊(六五)

- 107 新猿楽記 藤原明衡撰 写 一冊(二八二)
- 106 伏請考訂玄同先生 小野沢章実撰(自筆)文政一〇年 仮綴 一冊(二八一)
- 105 清陸謙画水滸百八人像賛臨本 南溟摸・赫洲再写 摸写 一卷(二八〇)
- 104 明陳洪綬水滸百八人像臨本 北齋弟子某摸 摸写 一卷(二七九)
- 付 水滸隱微評 馬琴自筆
- 103 足利学校藏書并附考 吉田漢臣 写(馬琴朱書入) 一冊(二七八)
- 102 瓊浦偶筆 物類和漢称呼部 平沢元・撰 写(馬琴識語)天保一〇年 一冊(二七七)
- 101 通玄算法記 写(馬琴識語)文化五年) 一冊(二七六)
- 100 地震考 小島好謙撰 刊(文政一三年) 一冊(二七五)
- 99 藻屑物語 馬琴写—文化六年 一冊(二七四)
- 98 蕉門頭陀物語 建部涼・撰 馬琴写—享和三年 一冊(二七三)
- 97 子姪に俳諧を禁するのふみ 成島鳳卿撰 馬琴写—寛政八年 一冊(二七二)
- 96 露川責 各務支考撰 写(延享二年・馬琴識語)文政五年)一冊(二七一)
- 95 俳諧論 雲裡撰 鶏忠写(羅文識語)天明三年・馬琴識語)一冊(二七〇)
- 94 + 警女口説地震の身の上 刊(馬琴識語)文政一二年) 一冊(二六九)
- 93 水鳥記 三卷 地黄坊樽次撰 刊(松会板) 一冊(二六八)
- 〃 附 いほぬし 増基撰 刊(群書類從卷三〇三) 一冊(二六七)
- 92 土佐日記 記貫之撰 一冊(二六六)
- 91 一人三臣和歌 後水尾院等撰 羅文写 一冊(二六六)
- 108 團治欄干抄図 写 一冊(二八三)
- 109 三芝居吉原由緒書 羅文写 一冊(二八四)
- 110 院本釈文 抜抄 島中銅脈撰 馬琴写—文化九年 一冊(二八五)
- 111 ねさめのすさひ 上 石川雅望撰 馬琴写—寛政九年 一冊(二八六)
- 112 後は昔物語 平沢常富撰 馬琴写—文化九年 一冊(二八七)
- 〃 附 おらく物語 同右
- 113 松窗雜録 万松山曼陀羅開帳狂詩附 石川豊翠撰 写 一冊(二八八)
- 114 戊子八月初旬京師奇談録 馬琴写(文政一一年) 合綴 一冊(二八九)
- 附 石川年足朝臣墓あらはれし其聞書并墓誌のうつし・捷経太平記(他筆)
- 115 本朝医談 二編 那須恒徳撰 刊(文政一三年) 一冊(二九〇)
- 116 類証普濟本事方抄録 宋・許叔微原撰 宗伯写(馬琴識語) 一冊(二九一)
- 117 救民薬方録 阿部正興撰 刊(文化八年序) 一冊(二九二)
- 〃 烏竜疳中丸 藤誠之撰 刊(文化一〇年) 合綴 一冊(二九二)
- 〃 方道案内書 方亭魚體人撰・門人記 刊 一冊(二九三)
- 118 犬追物御覧記 林恕撰 写 一冊(二九四)
- 119 義貞軍記 寛永六年刊 一冊(二九五)
- 120 元享釈書王臣伝論 師鍊論・谷重遠評 刊(元禄九年) 一冊(二九五)
- 121 + 答問鈔 雜田義方撰 刊 一冊(二九六)
- 122 海鱸図説 附採捕鯢絵説 渥美赫洲摸 摸写 一冊(二九七)
- 123 拾補日本後紀 二〇卷 写(馬琴校合)文化六年) 一冊(二九七)

宛委余編 卷一至一一 明・王世貞撰 写(馬琴識語—文政三年)

四冊(二〇八—二一一)

*補記 「總類」の印刷目録には、現在の曲亭叢書中にあるつぎの三点が落ちてゐる。『国書総目録』はこれによつたので同様。

1 笠翁伝奇十種 二〇卷(内唇中樓二卷欠) 清・李漁撰

世徳堂本 清刊 一八冊(二二六—二四三)

2 唇中樓伝奇 二卷 清・李漁撰

清刊 二冊(二四四—二四五)

3 南総里見八大伝 第五輯卷三〇至三二・第九輯卷七至二八

・三〇至三五・四一至五三上 自筆校正本 四六冊(二四六—二九一)

しかし、昭和二十二年十一月の『百回忌 馬琴展覧会陳列目録』(謄写版)には1・3が出品されていて、小番号も同じである。但し、21の「曲亭馬琴遺墨」の小番号は(二三六)のままとなっている。この三点は展覧会に先だつて入手したが、そこまで手が回らなかつたとみるべきであろうか。もとより印刷目録の「文学之部(上)」(昭和五年現在)にもこの記載はない。なお、この展覧会には滝沢家からの特別出品があつたが、右の三点を譲られたという記録は見えず、今は館蔵の入手の経緯は明らかにし得ない。滝沢家からのものは今は天理図書館へ寄託されている。

「曲亭遺墨」の小番号(二三六)は現在は(二九二)に訂正されている。

三 曲亭所有草稿類目録

三村竹清の『本之話』(岡書院 昭和五年、青裳堂書店『三村竹清集二』

所収 昭和五十七年)に「曲亭遺書」と題して「篁村翁の反故堆中に、曲

亭所有草稿類と記せし一紙あるを見る」として「敬惜字紙下巻」以下一八一種をあげている。その末に「右所有入京橋区明石町四番地滝沢繁引受人同所関□□ 出張人詰所小林栄」なる記述がある。この二人が先に引いた逍遙の『柿の蒂』に登場する人物であるが、滝沢家には該当する名前の人が見あたらぬ謎の人である。木村三四吾氏は先にあげた「馬琴遺稿流傳始末瑣記」において詳密なる調査追求を展開されているが「滝沢繁なる人物について、結局その素性を明らかにし得なかつた」という。私もまた同様な結果であつた。木村氏はまた同誌においてこの目録と早稲田の曲亭叢書との比較対照もされている。

ところで、その「曲亭所有草稿類目録」に竹清の引く篁村のものとは別種のもが存在する。草稿類の売り込みに廻るにあたり、少なくとも二通以上作られていることになり、私見ではここに紹介しようとしているものが先に書かれ、次に書くに当たつて省略したり、整理したものと思われる。従つて複数の人物に遺稿売却を持ちかけ、あるいは篁村より先に訪ねた某が幾らかを抜き、其の残りの中から篁村が購求したと考へてみたりしている。五冊あつた日記が二手に別れ、曲亭叢書に入らなかつた分が、大戦後になつて出現し、天理図書館の所蔵するところとなっているが、或いはこれは先客の購入したものであるか。また曲亭叢書の中に目録外のものがあるのは、恐らく大概のところは目録にあり、なお他にもある故、それは来臨御一覽の上でという如き口上もあつたのではあるまいか。

指定の日は篁村の目録の記載と同じ「八月廿七日より同三日迄」「若日限差支二候ハ、九月十二日より丁日ニ詰居」とある。しかし木村氏のいう「売買に関する交渉文書である以上、書式の通例として必ず日附は備えていたはずと思われるが、そこまで筆録しておくことの煩わしさを竹清は厭い怠つたのだろうか」という疑問は、竹清の省略ではなく年の記載はないということ、可成り原本に忠実に依ったと見てよいのではあるまいか。ともあれ、別本「曲亭所有品草稿類」を紹介する。原本は巻紙一紙に墨書している。

高さ一七センチ、長さ三四三センチ。便宜上、() 付の一貫番号を付し、曲亭叢書にあるものには、頭に○を付した。なお、冊数に疑問あるものもある。必要あると思われるものには*を付け注を施した。また篁村本を(B)として注記した。但し「全」「巻」「式」のような違いは取り上げなかった。詳しくは『本之話』を参考のこと。

曲亭所有品草稿類

石摺物

○ (一) 一〇敬惜字紙 小成 下巻

仁井田好古^字 仁齋^字 左近少将源定信八十五歳

江川義啓 ○七十歳源弘賢^字 まつたいらつゆ^字

六歳 ○蒲生君墓表 松本山雷錐乃 ○無石書

○滝沢祖先妻ノ霊六世孫ノ詩

*叢書(二二二二三)二巻あり。B細目なし。

(二) 一〇すつるもをし 上巻摺物

前大乘寺九十翁愚禪書 鈴木牧之老翁 文晁 武清

雪虫 椿年 雪平 十返舎一九 長宣 蓑笠漁隠題

字 牧之 蹄齋 文二 椿年^画 徳斎^字 牧之^画

京山 蓑笠 樹園 百樹^字 昌逸 昌雲 昌成 其

阿 貞起 信龜 豊貞 季厚 通孝 信盛 白功

昌功 昌買 練山^字 秋月庵牧之^画 花天竺三石形図

三十五図 石翁亭 永利^書 舟遊^{鳥羽絵} 岩井半四

郎書付 一拂斎豊広絵 英一蝶筆画 豊広写 狐雪

庵集帛^画 竹樹園字 木場屋夜雨庵三升^字 国貞画

二葉 国貞句 元祖団十郎似顔 狂歌堂 同六樹園

故豊国^絵 団十郎八代迄似顔八代目八二代目豊国 元祖豊国^絵

京山^字 詩 三升ノ句

文二 椿年 王帯 国丸 竹谷 武行 国芳^{絵三葉}

北溪^{四葉} 寛船舎^画 六樹園 真顔 蜀山人 京山書

*B細目なし。

(三) 一 豊国^絵 国貞^絵 貞房^{絵三葉}

(四) 一 石忠書^一 馬琴書^{二葉} 弘法大師御筆

(五) 一 東洲左潤書 鏑瀾書 鶴荘陳景山書

(六) 一 李花園書 僧勸励拝具

(七) 一 飯台滝沢解題并書 趙^(離説)書也 江山菅為宝蔵判

(八) 一 新板書帙上中下 三冊

- (九) 一 十評発句集 全 壹冊
- (一〇) 一 千草の根さし 全
- (一一) 一 桜雲記 上 壹冊
- (一二) 一 竹村上人由来記 全
- (一三) 一 東岡舎附合集 自寛永二年至全六年
自全七年至十年 合 二冊
- * (一四) 一 参照。
- (一四) 一 金比羅利生纜 草稿 二冊
- (一五) 一 新編金瓶梅 九集 草稿 九冊
第十 草稿 九冊
- (一六) 一 南総里見八犬伝原簿 草稿 参拾冊
- 自天保二年至十二年迄ノ分
- * 叢書は三七冊。
- (一七) 一 八犬伝八輯下帙篠斎評 壹冊
- (一八) 一 八犬伝八輯下 桂窗評 貳拾一冊
- * 叢書は「五冊」(八二―八六)。
- (一九) 一 八犬伝菅佐渡の国人石井夏海よりの書 全 一冊
- (二〇) 一 附合句卷 壹冊
- * (二一) 参照。
- (二一) 一 奥州後三年記 伊勢氏家本 借受而写也下 壹冊
- (二二) 一 平安人物志 卷上 壹冊
- (二三) 一 鴉鷺合戦 小 壹冊
- (二四) 一 見聞記 小 全
- (二五) 一 ゆきを花 壹冊

新浄留理正本

- (二六) 一 由井浜政語入船 草稿 壹冊
- (二七) 一 新版源平系図 壹冊
- (二八) 一 露川責 完
- (二九) 一 和歌要櫃 壹冊
- (三〇) 一 年頭新話 "
- (三一) 一 月の両話 "
- (三二) 一 伏請考訂 "
- (三三) 一 玄同先生 "
- * 叢書、106「伏請考訂玄同先生」一冊(二八一)。
- 追善
- (三四) 一 短冊 蘇山 孤遊二葉 花山へノ弁 一葉宛
孤遊 五山二葉 馬琴ノ句 一葉宛
貞七 滝沢宗伯へノ書 一葉
- (三五) 一 陳洪綬水滸百八人画像臨本 壹卷
- (三六) 一 海鱈図説 壹卷
- (三七) 一 清陸謙画水滸百八人像賛臨本 箱入 壹卷
- (三八) 一 返魂余紙別集 箱入 上写 壹卷
下写 壹卷
- * 現、天理図書館蔵。木村氏は『本之話』の「反魂余紙」の項により、
篁村の生前に千金の高値で大坂に流出、大正三年京都の古書市で最
高の二千金で落札されたことをいう。
- (三九) 一 受通流茂鴛鴦別集 壹卷
- (四〇) 一 玉照堂遺愛字紙上下式卷各箱入

○ (四二) 一〇家廟遺墨 第三第四第五 式卷 内巻巻ハ
箱ナシ

*木村氏の「流傳始末瑣記」に、正しくは三巻とあるべきところとして、天理図書館寄託の「滝沢家寄託書目録」の「24家廟遺墨巻 三」

あることの記載を引き、「則ち全六巻あり、これは別櫃に収蔵五巻

のうち第三巻にあたる。早稲田大学図書館馬琴叢書中の同名巻一・

二・四・五の四巻はこれに倣本で、併せて別櫃五巻は滝沢の家から

は流出したというものの、ここに無事完存することになる。曲亭所

有草稿類目録の巻数標記に誤りがないとすると、その第三巻は篁村

に渡らず、滝沢繁の手に留まり、更にただ今は滝沢当家に伝存、そ

して第二・四・五の三巻と同日録に未載の巻一を篁村は入手したら

しいことになる。その巻三のみを求めなかったのは何故か。又、繁

の手許からどういう経路をとつて滝沢家に還流したのか。それが箱

書の如き内容のものであるが故に、篁村は求めずして返却したとい

うかの家譜印鑑類中のものだつたのだろうか。とすれば、他の一卷

以下の巻々の説明に窮してしまう」とある。そして本目録もBも「第

三」とあるのを「第二」としている。曲亭叢書は第一・二・四・五

の四巻(二二六―二三〇)。

○ (四二) 一 惜字雜箋 春秋 六冊

(四三) 一 諸国採葉記要略 夏冬 全 壹冊

○ (四四) 一 読記小識 全 全

○ (四五) 一 日次紀事 全 全

○ (四六) 一 縁起部類 三四五 三冊

*一〇八(式・六)・一八八(巻)をあわせて叢書の六冊(一五五―一五九)になる。

Bは「三三四五六 六冊」とするも「一」を落す。

○ (四七) 一 故事部類抄 三冊

* (八二) 「二ノ巻」・(二〇七) 「一ノ部」を合わせて叢書の五冊

(五二―五五)になる。Bは(二〇七)を落す。

○ (四八) 一 園冶欄干抄図 壹冊

○ (四九) 一 続綱面談草稿 東岡舎記 全 壹冊

○ (五〇) 一 東都近郊図 全 全

○ (五一) 一 俳諧を禁するふみ 鳴鳳脚述 全 全

○ (五二) 一 告志編 全 壹冊

○ (五三) 一 犬夷評判記^{第二} 編輯料 全 全

○ (五四) 一 栖傘両談序 全 全

○ (五五) 一 明板水滸後伝序評 全 全

賀茂保憲家集

○ (五六) 一 頓阿法師高野日記 全 全

藤原隆房艶詞

○ (五七) 一 訂正古訓古事記 中 全

*八八・一〇五参照。B「三冊」にまとめる。

○ (五八) 一 院本釈文 拔文 全

○ (五九) 一 師竹庵聞書 全 一冊

○ (六〇) 一 龍説考 〃

○	(六一) 一	老鳥菴評批言之弁	全	○	(八〇) 一	讚岐直島長三宅氏由緒	全
○	(六二) 一	俳諧論	全	○	(八一) 一	遊女五拾人一首	全
○	(六三) 一	松窗雜談	全	○	(八二) 一	故事部類抄 二ノ卷	壹冊
○	(六四) 一	本朝紹運統録	全	○	* (四七)・(一〇七) 参照。朱にて〇印あり。		
○	(六五) 一	元享釈書王臣伝論	完	○	(八三) 一	奥羽軍記 旧名陸奥雜記	一冊
○	(六六) 一	天目山桜雲寺詩歌 羅文筆	全	○	(八四) 一	俳諧うやむやの関	全
○	(六七) 一	もうりやう談	全	○	(八五) 一	都能手不理	全
○	(六八) 一	足利学校書目	全	○	(八六) 一	稗説虎之卷	全
○	(六九) 一	版本 日本事方抄録	全	○	(八七) 一	産弁	全
○	(七〇) 一	本事方抄録	全	○	(八八) 一	訂正古訓古事記	全
○	(七一) 一	訓家食札短歌	全	○	* (五七)・(一〇五) 参照。B (五七) 「三冊」にまとめる。		
○	(七二) 一	扁額軌範	全	○	(八九) 一	北条分限帳	全
○	(七三) 一	奇方雜集	全	○	* B 「分附帳」。		
○	(七四) 一	麦林集天	全	○	(九〇) 一	新猿染記	全
○	(七五) 一	東岡舎附合集 自天明三年至寛政六年	全	○	(九一) 一	風月菴主に答る文 百川合会叙 東岡舎蔵書目録	全
○	* (一三三)・(二一〇) 参照。Bに同じ。						
○	(七六) 一	皇統授受図	壹冊	○	(九二) 一	字音かなつかひ	全
○	(七七) 一	後ハ昔物語	全	○	(九三) 一	解体真図	全
○	(七八) 一	よそめのすゝろ	全	○	(九四) 一	藻屑物語	全
○	(七九) 一	曲亭閑記	全	○	(九五) 一	異聞雜稿	全
	* (一三八) 参照。			○	(九六) 一	笠の露	完

- (一三二) 一 日記 合 五冊 (一四六) 一 国家論憶説 全
- *叢書、文政十一・天保三・四年。天理、文政十・十二年蔵。
- (一三二) 一 小夜阿羅志 全壹冊 (一四七) 一 書文集
- (一三三) 一 戲子廿六歌撰換色紙 草稿 全 (一四八) 一 返魂餘紙 卷一
- (一三四) 一 新編金瓶梅 草稿 二冊 *これも木村氏は森銑三『近世人物夜話』より、内容の一部を紹介した所蔵者久田米僊の文章が明治三十九年一月の「新小説」にあり、また市島春城『鯨肝録』に安田善次郎の新収書披露会で一見の記事ありと記す。
- *叢書一冊。
- (一三五) 一 戊子八月初旬京屋奇談録 全壹冊 (一四九) 一 新撰三百一人首 全壹冊
- (一三六) 一 天明災異記 全 (一五〇) 一 ねさめのまよひ 全
- (一三七) 一 醫療亭北盛君作別録尾間巻捌 上 ○ *「すさひ」の誤記。B「すさひ」。
- (一三八) 一 回章間記 三ノ部 壹冊 (一五一) 一 追善俳諧表六句 全
- *「曲亭」の誤記か。Bになし。叢書(六〇—六一)二冊。 (一五二) 一 瓊浦偶筆物類和漢称呼部 全
- (一三九) 一 松かさ利 合本 壹冊 (一五三) 一 魯西亜志 全
- たのしみ美 合本 壹冊 (一五四) 一 芭蕉翁終焉記 全
- 新撰曾根物語 合本 壹冊 (一五五) 一 女郎花五色石台 第一集草稿 壹冊
- (一四〇) 一 新曲催馬楽 狂歌郭の家桜 歌垣評角祇 合本 壹冊
- (一四一) 一 惣会国歌章録 壹冊 出版本ノ部
- (一四二) 一 むかし嘶今ちよほくれ *B、見出しなし。
- (一四三) 一 金瓶梅五集篠黙桂三評 壹冊 *B「一、銅籠鳥九冊」(一六一)ここに入る。
- (一四四) 一 施本救民薬法録 全 壹冊 (一五六) 一 合類大節用集 言辞 一ヨリ十終迄 合 十冊
- 寛政九巳年九月ヨリ (一五七) 一 新定税目 全壹冊
- (一四五) 一 入門名簿 全 壹冊 (一五八) 一 絵本真指寶ノ下

*Bになし。

(二五九) 一	五大力後日物語	壹冊	〇	(二八〇) 一	水鳥記	上下 貳冊
(二六〇) 一	答問鈔	全		(二八一) 一	五大力後日物語	壹冊
(二六一) 一	飼籠鳥	九冊		(二八二) 一	田子養生訣	全
(二六二) 一	本朝画纂	全壹冊		(二八三) 一	俳諧歳時記	全
(二六三) 一	俳諧百回鶴乃跡	全		(二八四) 一	遊 <small>俳</small> 似顔錦絵 国貞 国安 豊国 国芳 合	三拾三存
(二六四) 一	北越大震戯曲	全	〇	(二八五) 一	絵本上難波宮祭	壹冊
(二六五) 一	土佐日記 附いほぬし	全		(二八六) 一	長崎絵図 共二本下	壹冊
(二六六) 一	先進繡像玉石雜記	全	〇	(二八七) 一	欽定撰詳拵註便覧戸用憲丁書 <small>大清 道光</small>	五年 壹冊
(二六七) 一	玄同放言 卷ノ一二	貳冊		(二八八) 一	縁起部類	壹冊
(二六八) 一	むさしあふみ	全壹冊			右所有入京橋区明石町四番地	
(二六九) 一	狂歌机乃塵	全			瀧沢繁	
(二七〇) 一	義貞軍記	全			引受人	
(二七一) 一	将門記	全			全所関□□出張所詰 小林栄	
(二七二) 一	<small>落中落外 町々小名</small> 大成京細見絵図	壹			八月廿七日より全三十日迄	
(二七三) 一	紀行部廻国雜記	全			九月四日ヨリ全七日迄	
(二七四) 一	玉露童女行状	全			右ノ日ニ御来臨御一覽可被下候。	
(二七五) 一	崑岡炎餘	全			若日限御差支候ハ、九月十二日より	
(二七六) 一	讃岐国真嶋全図	壹			丁日ニ詰居候間、御来臨奉待候也。	
(二七七) 一	地震考	全一冊			小林栄	
(二七八) 一	帰郷日記	全			*「関□□」難読、Bにおなじ。図版参照。「関税□」乃至「関税局」	
(二七九) 一	先哲叢年表	全			とでも読めれば、維新後税関吏となったという馬琴の孫女幸の夫で	
					離縁になった吉之助縁の人物となり、木村氏の第一の推理、「滝沢	

繁なる人物は、吉之助・てる（後妻）の娘の誰かにあたる、という筋書にも一縷の可能性は生れもする」と一致する。吉之助は離婚後にもなお滝沢氏を称していたという。

川文人
吉之助
...

*補注・右の目録の題名の肩に心覚えと思われる朱点や朱○が付けられているが特別な意味はないと認めて省略した。

付 曲亭書簡集

なお、篁村は明治四十四年『馬琴日記鈔』を刊行しているが、逍遙宛書簡に、例の殿村篠斎宛の馬琴書状について触れているのがあるので、それを引用しておくこととする。その前年の大正五年のものは残されていない（百十三、大正六年一月二十一日。九集、昭和五十五年）。

（前略）昨年来ハ諸事不出来にて御心配も相掛け、私も大弱りニ御座候ひしが、幸ひにも 旧臘伊勢松坂之知人堀内鶴雄と申仁より、曲亭馬琴翁手翰六卷二箱、嫁路女代筆一卷、及び木村黙老手紙四卷一箱を借り受け、其の箱を開き候時ハ目もまぶしく、玉や黄金もまろび出るかと悦び申候。是で今年の損もうめた愁眉開き候事ニ御座候。右尺牘ハもと殿村篠斎所蔵を、殿村家没落（ト申す程にハなきか知り不申候が）、堀内氏之手へ歸したるものにて、実のところ読了後期待したる程にてもなしと、一度は歎声も発し候が、併し曲亭研究者ニ取りてハ、六箱三略二もまさり、虎之巻とも称すべきものと自ら戯れ申候。書中、例之世間之奇談珍説を報ずる事多く、それらハ大概、小生所蔵を納めたる早稲田図書館曲亭文庫中にあるもの二候が、世二有難きハ著作ニ就きての内幕話し、生活二ついでの内明け話にて、最も奇なるハ作が、いやでくならぬ、是も世わたりとて是非なしとの嘆息、二三ヶ所ある事二候。もつともそれハ草双紙之作二ついでにて、八大伝・俠客伝・美少年録についてハ、例な

がらの大気焰ニ御座候。柳亭種彦之田舎源氏を篠斎がほめしに付て、少し負嫌ひの貶評あり。京山之無礼二ついても筆諫あり。屋代弘賢も退治られ候事など面白く候。此の尺牘、皆天保年中老後の筆にて、読かね候処多く候ゆゑ、借覽之報ひには残らず清書し、且つ書中不

解の事にハ頭註を加へ、一本ハ堀内家へ贈り、一本ハ小生所蔵仕候心組にて、其事ハ先方へも申通じ、承諾をうけ候。いづれハ右写しを御覽ニ入れたく存候。路女代筆の分ハ代筆ゆゑ、委曲を尽さず候得共、天保度改革御沙汰にて、地本問屋・絵草紙屋・団扇屋、並びに画工も作者も、大打撃を蒙り候を詳細ニ記しあり。種彦之身分ニ付、参考ニ相成り候事も有之候（種彦ハ此の御沙汰ニふるへて自殺したる由之伝へハ有之候が、中々其事を真ニしたるかとも推測致され候。代筆にての長手紙、また馬琴伝ニ書遺すべからざる事と存候。此等之文中より文外之有様を思ひやり候へば、一々来歴ありて小生に取り候てハ興味不少候。木村黙老のハ篠斎へ対し丁寧を極め、馬琴同好之意を致し、且つ文通毎ニ馬琴之起居近況を案じ候文言有之、其の崇拜之度も推量られ申候。御承知之如く木村黙老ハ讃洲高松之国老、身分も重く、且つ登庸され候人にして、同好とて黙老へ対して懇懃を極め居り、問々其の抱負をも洩らし候ところ、二人がいかに馬琴を昇ぎしかゞ思はれ、珍本を相互ニ賃借して、篤学（むしろ好事か）の体もうかゞはれ候。小生編述の馬琴日記鈔について森鷗外君ニ冷かされ候が、実に馬琴の御神輿をかつきし者、生前ニ於て此の二老あり。是に小津桂窓と櫟亭琴魚を加へてハ四天で担ぎしと

も可申、嬉し笑ひも致され候。大坂にて八犬伝を芝居に仕組ミ好評なりしに、大塩乱ニ依りて中止となりし事など、馬琴も間接ニ大塩之騒乱之影響を蒙りしなど、未だ心付かざりし事にて、是を黙老が名作を汚さざりし天之たすけと悦びしも面白く存じ候。

是ニよりて考へ候に、讃岐之木村家にハさぞ馬琴自筆物も多く、また殿村篠斎よりの返書も如斯ありて、外面よりの馬琴之事蹟、別趣味ある事も知れ候半と、黙老責をそゞろに思ひ立れ申候が、其の手蔓なきを恨ミ候。併し是も長い年月に如何いふ好機ありて見る事を得るやも知れずと、他人に宝をかぞへ申候。路女代筆の中ニ、亡妻を悼ミたる歌数首有之、昔より歌人誠を歌はずとハ申候得共、かゝる場合にハ誠より出しもあるもの、氣の毒の感とまた盲目にて幼孫を抱へたる、悲痛之情も思いやられ申候。されども、他より借金を致さずと知己ニ対して意地を張るは一倍氣の毒ニ御座候。勘定向も精神ニ過てうるさき事、自筆手紙の半を占めて、是ハ避易にて候。以て其事ニ留意したるが察せられ候。八犬伝其他之評ニ就ての内幕話しも面白く候が、是ハ既ニ早稲田文庫ニ収まりある事多く候。まだ黙老の手紙ニ巻見ずニあり候。是ハあまり一度に御馳走を頂いてハ楽みニ致し置く事ニ御座候。（下略）

相馬屋の原稿用紙五枚に認められ、差し出しは「牛込赤城下」より「熱海あら宿」宛になっている。篁村既に六十三歳、此れまでの過度の酒のため、糖尿病に喘息を加え、医師より禁酒を言い渡されながら断行出来

ずに苦しみを重ねていた。そして四年後の十一年六月二十日に没した。

右の文中、堀内鶴雄（快堂）の『曲亭書簡集』は大正九年に百部限定出版の後、三村竹清の『日本芸林叢書第九卷』に所録され、さらに「曲亭書簡集拾遺」を、また篁村所蔵の長州藩の中老藤浦宛の「曲亭書状写」を加えた。これは関根只誠を経て竹清の蔵になったものであり、「寄曲亭書簡」も竹清の解説に「篁村旧物、該に載するものは篁村翁旧物也。翁嘗て曲亭の遺物を滝沢太郎の後人より獲、其残滓一筐あり、筐底に、文化五年戊辰七月朔琴嶺滝沢鎮五郎と書す、蓋曲亭翁の筆なり。此書簡は今竹清の架中に在り。此書簡は筐中の一部に属す。因にこゝに附す」と記している。ただしこの書簡は件の目録にはない。

なお、竹清はその後「曲亭馬琴の書」（「書苑」五―十二 昭和十六年十二月。『三村竹清集六』青裳堂 昭和五十九年 所収）にもそのことを書いている。そして「篁村翁所蔵の馬琴の遺書は大躰早稻田図書館に収まっているが、其他の反故が滝沢といふ烙印のある墨塗の箱に一杯あつて、それは翁の歿後私が譲り受けた。其中には馬琴へ宛てた諸家の手紙や、家の仕来りを書いた冊子などもあり、手紙は藝林叢書の曲亭書簡集に附し、盆の行事は集古へ載せて置いた。但し、此馬琴宛の手紙三十四通はほんの残滓で、外に何帖かあつて、私も寓目した事がある、朝倉無声が全部かそれとも一部か江戸趣味へ載せたと思ふ。――（中略）――曲亭雜記を出した四谷の渥美氏と、長女幸（咲）の飯田町の清左衛門氏と三軒で、遺物は三分されたらしく、渥美氏が帝国大学へ収まつて、震災に亡びたと聞いてゐる」と。

――平成九年十一月十二記――

本稿は平成八年度の国内留学の成果の一端である。なお演劇講座の折の「三」は演劇博物館紀要「演劇研究」二〇号（平成九年三月）「『雙柿舎』扁額と曾津八一 坪内逍遙をめぐる人々―断片より」として発表、「一」は拙著『大惣蔵書目録と研究―貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目―』本文篇（昭和五十八年 青裳堂書店）に発表したものの大略である。記して報告の一部とする。